

中央図書館へ寄託することとなり、この作業は完了し、当分の間、筆者と図書館長が管理することとなった。なお、長崎家の蔵書については、先年筆者により刊本、写本に分けて目録が作成され『医譚』に公表されている。

四、捨てずに保存してきた史料は、年を経るごとに見直すといよいよ捨て難い史料となり、まずは大分類しつづいて小分類へと、個人史料を目下整理中である。

でき得れば目録作成を最終目標にしていますが、それ以前に、まずカード作成から面倒でも始めることとし、その準備を進めております。つぎに重要なことは、収集した史料を如何に保存するか、また、管理する上で、徐徐に家族に家庭内教育をはじめ、協力させる方向が得られるようただ今努力中であり、成功に期待をかけております。

五、福井県は医史料の宝庫であると理解しています。この事については、本学会の名誉会員である岩治勇一先生のご協力を得なければなりません、地域の会員の強力な支持も重要であり、ぜひとも成功させねばと考えております。

20 「医学文化館」を援助できないものか

富田 達夫

日本医事新報No. 3874、一九九八年七月二十五日号の
大滝紀雄氏の「医学文化館の将来」を読んで驚かぬ者はいないだろう。折角の文化施設が閉鎖され廃館になるうと
している。今、ここで積極的に手を打たねば徒らに悔を残
すばかりだ。

史料保存という何世紀にも亘って継続されなければならぬ
事業には経済的な援助は当然として、啓蒙運動を抜きにしては
片手落ちとなる。各大学に医史学的史料を維持してゆく熱意が
ないのなら、上記「医学文化館」を医史学講座をもたない医学部
の史料保管所にできないものか。各教室に、ほこりまみれになっ
ている投棄寸前の資料を「医学文化館」から定期的に全国の各
大学を巡回して収容する、などの方法が講じられぬものか。